

介護老人保健施設しおさい

症例概要 利用者氏名：S.T様（70代 男性 要介護4）

利用期間：平成29年 8月 ～ 現在

経過：

平成29年2月下咽頭がんの診断。3月喉頭全摘、両側頸部郭清術施行後、せん妄が出現した。コミュニケーション、本人の意思を尊重した看護・介護を行なった結果、その人らしい生活を取り戻せていった事例

内 容

3月の術後、せん妄症状が現れ、向精神薬が必要となった。4月には、やや落ち着いたものの昼近くまで睡眠している状態であった。ハッと覚醒すると机をバンバン叩いて合図をしたり、手近の物を投げてくるといったイライラしている様子が顕著にみられ、看護師への暴力などもあり、身体拘束での対応となっていた。7月頃になっても落ち着かず、癩癩が著明になった為、向精神薬を再度調整。痛みなど不調の際に不機嫌になったり、時に易怒性や、つねるなどの行動がみられたが、短時間で収束し、大きい逸脱行為には至らないようになってきていた。しかし、定期薬の他に、頓用で向精神薬が日中に1種、夜間帯1種、入眠困難時2種処方されていて、また定期的な吸引や褥瘡処置も必要で在宅での介護は困難と判断され、平成29年8月当施設に長期入所となった。

入所後に行ったのはコミュニケーションの回り方だった。永久気管孔の影響で、言葉を発することが困難であり、まずは筆談ができないか試みた。何度も根気強く実施してみたが、なかなか積極的に取り組んでもらえず断念した。それでもこちらの問いかけに対し、理解は可能であった為、継続して問いかけを行っていくとジェスチャーや小声ではあるが発語が聞かれるようになり、また、何を伝えたいのか職員も理解することが出来る様になり、その頃より笑顔も増えていった。現在、日中は出来る限り、離床していただくことで夜間も頓用なしで良眠されている。日中も含め、頓用での向精神薬は使用していない。食事の際、嫌いな野菜を残して為「野菜は嫌いですか?」と尋ねると満面の笑みで大きく頷き、周りに居た職員も笑顔にさせてくれる。

ご本人の意思を尊重した当たり前の介護・看護を実践すること、私たちはあなたのことをもっと知りたいのです、という根気強さを全職員でみせることで、ご本人のイライラや暴力的な行動を抑えることができた。ご本人が何をしたいかを真剣に、真摯に考えることが重要であり、コミュニケーションの取り方ひとつで、薬に頼らずともその人らしい笑顔ある生活を送ることが出来ると再確認できた事例であった。